



## 【新しい単元の紹介】

◆グリニッチ福音キリスト教会は、CS成長センター発行の教会学校教案誌「成長」のスケジュールに則って、聖日礼拝の聖書箇所とその日の主題を決めています。この五月から新しい単元「荒野の旅」に入り指導者であり預言者であったモーセと、そのモーセに連れられてエジプトを脱出したイスラエルの民の歩みから学んでいきます。モーセは王子としてパロの宮廷でエジプトの学問を教え込まれたばかりでなくヘブル人の母からヘブル民族の歴史も学んだ二つの文化を合わせ持った人でした。その彼がどのように神に取り扱われていくかを学ぶことは必ず私たちにとっても益となることを信じます。

## 荒野の旅

聖書箇所と主題

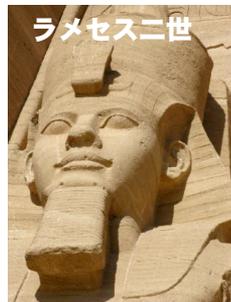
- **5/03** 誕生、挫折と逃亡 出エジプト 1～2章
- **5/10** (高見澤先生をお招きして/スペシャル)
- **5/17** 燃える柴 出エジプト 3～4章
- **5/24** パロの前に立つ 出エジプト 5～10章
- **5/31** エジプト脱出 出エジプト 11～12章
- **6/07** 葦の海を渡る 出エジプト 13～14章
- **6/14** 食物と水 出エジプト 16章～17:7
- **6/21** 十 戒 出エジプト 19～20章
- **6/28** 斥候たちの報告 民数記 13～14章



## 【トピック：出エジプトの年代】 (成長125号、p86-87参照)

出エジプトの年代はいつか。大きく二つの説があり、一つはBC15世紀とし、もう一つはBC13世紀とする。

- 1) BC15世紀説：I列王記6:1にイスラエル人がエジプトを出てからちょうど480年目にソロモンが神殿建設に取りかかった、とあるので、ソロモンの神殿建設の開始年として一般に受け入れられている967年を起点に考えると、BC1447となる。するとイスラエル人を迫害したパロはアメンホテプ2世となる。
- 2) BC13世紀説：倉庫の町ピトムが建ったのはラメセス2世 (BC13世紀) の時と考古学的には考えられており、イスラエル人がピトムとラメセスを建てたのなら出エジプトはBC13世紀となる。



## 【今週の英語】 The Last Words of Lincoln

"5 days after the Civil War had ended, Abraham Lincoln went to Ford's theatre with his wife, Mary Todd Lincoln. She recalled his last words as they sat there: " He said he wanted to visit the Holy Land and see those places hallowed by the footprints of the Saviour. He was saying there was no city he so much desired to see as Jerusalem. And with the words half spoken on his tongue, the bullet of the assassin entered the brain, and the soul of the great and good President was carried by the angels to the New Jerusalem above"

April 14, 1865. The Last Words of President Lincoln As Recalled By His Wife. Minor. Lincoln. p. 52"

「南北戦争が終結した五日後、アブラハム・リンカーンは妻メアリー・トッド・リンカーンと共にフォード劇場に行った。妻は観客席に座って語った彼の最後を言葉を次のように語った。「彼は聖地を訪れ、救い主の足跡で清められた場所を見たいと言っていた。エルサレムほど見たいと願っている町は他にはない、と彼は言っていた。その言葉を語り終わらないうちに、暗殺者の銃弾が彼の脳を貫き、この偉大で善良な大統領の魂は、天使たちに上に在る新しいエルサレムに運ばれていったのです。」

注) リンカーンの最後の言葉については他の説もあります。

### 【今週の暗唱聖句】

- ①「主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。」詩篇121:7

この詩篇は8節だけで非常に短く「丸ごと暗記」するとよい。この詩篇の各部分はいろいろな讚美歌、ゴスペルソングにも引用されているが、やはり全体をひとまとめにした時に、神への揺るぎない信頼と確信が伝わってくるのである。

- ②「怒っても罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」エペソ4:2

生きている限り「怒らざるを得ない」場面に出会うものである。正義が成されない時に「憤り、怒り」の感情が生じるのは神が人間にそのような機能を与えられたからであり、愛と正義が健全に存在し続けるために必要なものなのである。故に怒りは罪ではない。しかし、義憤から始まっても時間が経ち、きちんと処理をしないとその怒りに自己中心的な要素が加わり、罪深い怒りに変質してしまうのである。無論、最初から罪深い怒りも多い。そこで日が暮れる前に、正しく怒りの原因に対処して行くことが求められているのである。そのための聖書箇所を学び、この御言葉と合わせて覚えるようにすべきである。■

### 【先週のメッセージより】 ルカ24:13~43より

復活したイエス様が何より弟子達にいちばん求めたのは、御自身が生きている、ということ・・・

**Do Not Doubt 疑うな**ということであった。

